

ヒンリッヒ・フィンク＝アイテル

『弁証法と社会倫理学』

Hinrich Fink-Eitel
Dialektik und Sozialethik:
Kommentierende Untersuchungen zu Hegels "Logik"
Meisenheim am Glan 1978

紹介者：島崎 隆

著者のフィンク＝アイテルは、ヘーゲル論理学を再解釈・再構成するさいに、本質論に大きな力を注ぎ（本書二二〇頁中の九〇頁分に該当）、さらにそのなかでも反省論と反省諸規定論を詳細に分析している。しかもマルクス経済学など現実認識との関連も十分に視野に入れており、単なるテキスト解釈に終わっていない。さらにまた著者は、ヘーゲルの論理展開をヘーゲルにそって、何となくそのまま同じように解説するのではなくて、よりわかりやすくとらえようとして、大胆に図式化したり、ひとつの概念に1、2、3という指標を付けたりして、工夫を加えつつ、ヘーゲル論理学の論理構造をできるだけ緻密に明らかにしようとしている。

以上のような理由で、ここではとくに、ヘーゲル論理学の反省論の論理が著者によってどうとらえられているかを明らかにしたい。評者自身、ヘーゲルの弁証法的論理を解明するためには、反省論・反省諸規定論の論理構造の把握がきわめて重要であると考えているので、この点でも著者の試みを重視している。とはいえ、その試みはきわめて難解であるので、それを十分に認識して紹介できたかどうかには自信がない*。なお、著者は本書執筆当時、ハイデルベルク大学に勤務していた。そして著者は、ヘーゲル研究者としても知られるヘンリッヒ（D. Henrich）、トイニッセン（M. Theunissen）の指導を受けており、彼らの研究を十分に批判的に摂取していることが本書においても窺える。

*評者による本書全体の書評として、『一橋論叢』一九八六年二月号、二二五―二三二頁を参照のこと。なお、一橋大学のもとドイツ語およびドイツ文化担当の教員のライナー・ハーバーマイヤー氏に問い合わせたところ、フィンク＝アイテルはミシェル・フーコーらを研究したのちに、すでに一九九六年に死去しているとのことである。氏の情報提供に感謝したい。

ここで著者がヘーゲル論理学の全体をどう解釈したのかについては詳細に述べられないが、まず有論は「無関与性の理論 Theorie der Gleichgültigkeit」 「外的偶然の論理学」と特徴づけられる。ここに存在する矛盾を、つぎの本質論はあらためて内部に抱え込むことになる。それは「内的偶然の論理学」といわれ、そこに「反省の循環」が生ずる。ここでの矛盾やディレンマを克服した最後の概念論は、「自由論」として解釈される。こうして、ヘーゲル論理学を「客観的論理学」（有論、本質論）、「主観的論理学」（概念論）と区分する試みが、ここでは大きな意味をもっている。

著者は「反省としての本質」の箇所、①本質的なもの--非本質的なもの（S.76-79）、②仮象（Schein）（S.76-81）、③本質（S.82-85）、④反省（S.85-89）、⑤総括（S.89-94）の順に解説している。以下、この順に従って紹介・検討しよう。

第一の点では、有論から本質論への移行の意味を十分にとらえることが目指される。この意味で、「本質は止揚された有（Sein）である」という命題をいかに解釈すべきか。「止揚」の三つの意味に従い、この場合、①有は本質のなかで保存されている（conservare）、②本質は有の対自有的な否定として、それを高めている（elevare）、③本質は有の領域の超出と除去によってみずからの規定に到達する（tollere）、といわれる。このさい、本質的なものと非本質的なものの弁証法的関係は、上記の①と②の関係から発するが、③のレベルはまだ達せられていない。評者が思うに、本質的なものと非本質的なものが併存している状態は、まだ有の領域を十分に脱していないことを意味するが、その事実がここに関係するだろう。そしてそもそも、本質それ自身も、「否定的な否定としての有」であるが、まだ十分に有を否定しきれていない中間段階である。

第二に、さらに有の領域を否定していくと、それは「仮象」となる。著者は本質的なものと非本質的なものの関係の結果として、仮象概念の三つの意味を列挙する。それは、①非定有（Nichtdasein）であるところの定有であり、定有する否定性であり、②だがそれは、存在し、ひとつの直接性をもつところの否定性であり、③有と否定性のこの関係の結果、仮象はひとつの差別を、規定性をもつ。さらに著者は註で、仮象の微妙な論理について、XがYのように見えるとき、たしかにXは存立しているが、Yは仮象なのだから、Xは空無である。だからそれは、Zなのである。本質たるZが、XとYの関係を規定する、という。難解だが、仮象とは何かをより具体的に説明するうえで考慮すべき説明であろう。

第三の本質について。著者は、仮象とは、直接性2 と、それ自身直接性1 であるところの否定性との関係であると説明する。彼は、師のヘンリッヒを継承・批判しつつ、このように1、2 などの指標を利用する。ヘンリッヒでは、「直接

性2」は本質がもつ直接性であり、「直接性1」は有の直接性である。そうすると、仮象とはまず、本質論で認められる直接性2であり、そして有論からの残余である直接性1はすでに否定されている。この意味で、仮象は直接性2と上記の否定性の関係だということであろう。

ところでヘンリッヒは、直接性2は直接性1からの「意味のずれ *Bedeutungsverschiebung*」によって発生するものであり、だから本質とは、この意味のずれそのもの（直接性1＝直接性2）であるという*。だが著者は、ヘンリッヒのこの説明を不十分とする。すなわち、この二つの直接性は、論理学全体の枠内で、ともに一種の「自己関係」として押さえられるべきである。直接性1は本質論の直接性2との関連においてはじめて、相対的に安定した自立性をもつのである。いまや、有論の領域は、本質論の認識レベルから、すべて見直されなければならない。

*D. Henrich, *Hegels Logik der Reflexion*, in: *Hegel-Studien/Beiheft* 18, 1978.ヘンリッヒは「意味のずれ」「意味の発展」「意味の継起」などについてもつばら議論するが、ヘーゲル論理学のもつ世界観の側面についてはほとんど述べていない。

いまや上記の二点目の仮象論での三つの規定は、本質自身のそれとして、より高次元でとらえ返される。仮象の否定的性格は本質自身のそれであり、仮象の直接性も本質の否定的自己関係に由来し、仮象の規定性も本質自身が自己から区別して形成したものである。さらにいえば、さきの本質論的な直接性2が、他者にたいする関係を含んだ自己関係のもつ直接性であり、否定的な自己関係であるのにたいして、有論的な直接性1は、他者への関係に対立した自己関係のもつ単なる直接性にすぎない。

ところで著者は、本質論を「内的偶然の論理学」として矛盾や循環をはらむものと見ていた。そこに本質自身の仮象的性格がある。本質は他者にたいする依存性を、つまりヘーゲルが本質に対立する仮象の直接性と名づけるものへの依存性を自己内に内包している。ここに本質論の限界があり、こうしてわれわれは概念論へ進まねばならない。

第四の反省について。「絶対的な反省」としての「措定的反省」は有論の成 (*Werden*) の最初の本質論理的な回復である。しかし本質論的な成というのは、反省的な運動であり、「無から無への運動」であり、こうして自己自身へ環帰する。著者は「無から無への運動」について具体的に説明してはいないが、他者への否定的関係のなかで自己関係が成立することを主張する。AはBとの関係でAであり、BはAとの関係でのみBである。こうして、本質の反省運動は、最初から、他者を内包している。著者は本質について、関係項 (*Relat*) としての自己をみずからに対立的にもつ関係 (*Relation*) であると述べて、本質を「関係と関係項の関係」と規定する。この場合、関係項はある意味、本質に

とって他者になるのであろう。このさい本質は、他者2 としての自己にたいするものとして、他者1としての自己に関係する。このとき「他者1」は本質がもともと含んでいる他者であり、「他者2」は、それへと本質があらためて自己関係する他者を意味する。

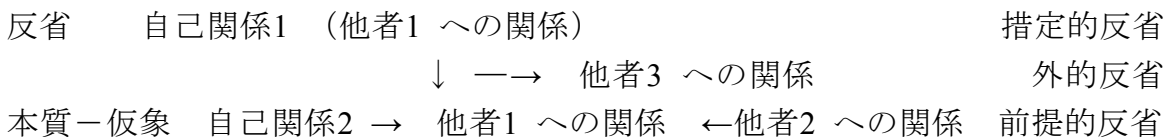
以下では、著者は反省の論理を緻密に解明しつつ、措定的反省・外的反省・規定的反省の弁証法的トリアーデを展開する。だが、この箇所の説明は難解であり、評者も十分に理解できていないところである。まず著者はここで、自分自身の指標の意味を簡単に明らかにする。一般に、「指標1」は媒介の直接性 (Unmittelbarkeit der Vermittlung) を意味し、「指標2」は媒介にたいする直接性 (Unmittelbarkeit gegen die Vermittlung) を意味する。だから、指標1 は、媒介が直接に内包する直接性を意味するが、そういわれると、媒介はすべて自己媒介として即・直接性を含むのであろう。そうであるから、「他者性1」といわれるとき、それは単に自己関係1 のモメントなのである。他方、指標2 は、媒介の外側にあり、それに対置される直接性であろう。評者の印象では、この指標の意味づけは、さきのヘンリッヒの場合とは異なっているように思われる (著者はここで「他者 Anderes」と「他者性 Andersheit」を区別している)。

さらに著者は、図式化によって以下のように提起する。



以上の一段目によれば、「反省」とは、そもそも「自己関係1」とされるが、モメントとして他者を含み、そこに「他者1 への関係」が成立する。また二段目の「本質—仮象」関係においては、本質はまだ仮象に対立する側面をもち、「自己関係2」となる。そして仮象は本質と対置されたものとして「他者2 への関係」という否定的なものである。反省を同一性と非同一性の同一性と規定すれば、このときの同一性が本質であり、非同一性は仮象である。そして反省の運動は、この本質と仮象の関係をさらに媒介するものであるが、そのなかであらためて自己関係を回復するものとされる。

著者は以上の図式をさらに発展させて、上述の三つの反省を説明する。



以上ではまだ規定的反省までは言及されていないが、まず一段目の「自己関係1 (他者1への関係) 」とは、さきの反省のことであり、それがあらためて「措定的反省」と規定される。あらたに登場した二段目の「他者3」とは、反省

運動のまったく外部に前提されている他者であり、「外的反省」とはこのレベルの反省である。反省の運動は、ここでは事物の表層にしか届かない。これはおそらく、評者の印象では、哲学史的には、唯名論的な個別のみが実在するとされる世界であろう。だが、この認識もヘーゲルは否定せず、全体的真理のひとつのモメントを表している。三段目の「本質－仮象」関係は、さきに示されたように、「自己関係2」と「他者2への関係」との外的関係であったが、それを前提として、論理のさらなる進展のなかで再び他者1の関係に環帰するのである。それが「前提的反省」である。前提的反省とは、自己関係2と他者2への関係を前提にして、外的関係にある両者をつなぐものである（ここでは、「外的反省」と「前提的反省」が区別されている）。

いずれにせよ、観念論者ヘーゲルは、この実在界のなかに反省の論理が内的に貫いていると主張する。だから結局、指標3は2に還元され、2は1に還元されることになる（「 $3=2=1$ 」といわれる）。そして著者は、反省の自己関係は、その（前提的な）非措定有のなかで自己において規定され、規定的反省となる、と述べる。つまり「規定的反省」は、措定的反省から外的反省を経過して、そこで再度反省の論理を回復するものである。この規定的反省の段階で、反省規定が生じ、つぎの反省諸規定論が展望される。

最後の「総括」では、反省論と本質論の限界の意味づけ、『精神現象学』の絶対知との関連、カント批判などが語られる。さて、本質論の限界については、著者は、そこでは他者への強制の面を免れていないと指摘する。なぜなら、たしかに反省はその否定性によって有論的な単なる移行を免れたが、否定の自己関係とは、やはり否定であって、自己否定を含むからである。同時にまた、そこで「反省の内的偶然性」が残るからである。というのも、反省は自己関係であるが、しかし同時に他者としての自己への関係である。そこではどうしても、他者関係と自己関係が完全に一致しない。こうして「反省概念のディレンマ」にいたる。反省は本質のもとへ有を完全に包摂するという意味で、威力（

Macht）を行使する。有はいまや単なる仮象になった。しかし、反省の偶然性が残るということは、かえって反省論の無力（Ohnmacht）を示すものである。

以上のようにして、著者は本書において、反省論の論理構造と限界を示した。

とくに反省の論理の緻密な分析はおおいに傾聴に値するものであるが、同時に、率直に言って、評者にはとらえがたいところが多々存在した。

ところで、反省の論理がそもそも欠点をもっているとしても、論理全体の叙述としては、世界における事物のダイナミックな運動のエッセンスを簡潔に示している。実は、評者の理解では、概念論の普遍・特殊・個別の論理も、この反省の論理の正確な理解なしにはとらえられない。万物はすべて反省・反照の論理を内包して、存在し運動している。ヘーゲル論理学が体系的に、自然哲学、

精神哲学の前に置かれ、現実界（自然界と精神界）の認識のための思考法則を展開するということは、世界の存在構造の骨組みをあらかじめ解明するという事にほかならないだろう。変化に富んだ現実界は、この純粋な論理構造が多様に肉づけされたものに他ならない（「論理的・汎神論的神秘主義」）。この意味で、論理学とは「純粋理性の体系」である。比喩的にいうと、論理学は世界を創造する以前の神の叙述にほかならない*。いわばそれは、神の頭のなかにある世界創造の設計図である。そして論理学のエッセンスが、反省論の難解な論理のなかに詰まっているといえよう。したがって、極論すると、論理学のなかでも、反省論において、世界創造と世界の存立の秘密が語られている。それは、反省、本質、仮象、措定、前提、直接性、媒介、自己、他者、関係、否定、非措定有などの一連の抽象的な論理語の有機的組み合わせからなっている。したがってここで、ロゴスの力（==哲学、学問）によってこそ（つまり直観によってでもなく、修行によってでもなく）、世界の創造の秘密が解明されるということが意味されることになる。おそらくヘーゲルは、ここで宗教と哲学を統合することができたと自負したことであろう。

* Vgl. Hegel, *Wissenschaft der Logik I*, Suhrkamp, S.44.